



正校  
七部集

坤





阿羅野

尾陽遠在檀

木堂主ノ荷

今子集を編

く名をあらはれといふ何故了此名有事

を志くを予もるのふねのひやもふいとせ

比御山橋藤せしとつらくの書院をあの

をくそその目とのふそ日の中舟修る

まは日まこ世ううやうをけしやな受

恙やふひのそれく義柳梅の綿と向

らそひてふきのおれうさまある風情

につまういさうの實をととあねふものこ

あれをふやのそ申ふのいさうあるふの

そつれなるのたさうふあうして娘中

のちあもつのはそそ雀のたえふをねま

てそそあのみをさうつらうと道々のそそ

るゆきむと比野のあはれ野るといふ

へ



元禄二年卯生

芭蕉抱青

○阿羅野



曠野集

花三十句

よりのあはく

ちよはくくともつり花の芳や山  
 ありまをいそぎもる花のあやうく  
 為るまをけとくくを丸の抜る  
 ちよの心とともらましくまよまむ  
 昔淋し花のうしろの鬼尾  
 山やふ喰りの志ゆる花見か  
 何事ともあえる人の長刀  
 みよのまをまきくハあまうまむ  
 ちよのあうり戸にまらうまむ  
 ちよのちよ客といままう花の客  
 花の山をちよくある枝のあま  
 見あけしうふりくふあぬ花の隙  
 見すのいろはあまうり花の時  
 ちよとれハ濁ぬま人よく  
 冷汁ふ熱をもよや花の陰

貞室 踏通 信徳 晨風 友五 尚白 去来 野水 龜洞 越人 俊井 一井 崩弾 舟泉 胡及

ちよあふ新う傘をいまよく  
 紫あは花咲あたり宵乃雨  
 ちよとれふちりく連たり花の枝  
 連くハやほまハとくハあの時  
 癒療の跡まともゆる花見か  
 あらけ水や風車賣花のとき  
 ちよあまうくくくくあるむう水  
 山あひの花を夕日よえ知しり  
 おゆりろや理窟ハちよふ花のま  
 ちよとれハや知花よりハの物まを統  
 獨まうく友選ハりハ花の山  
 花をくくけら昔ゆる尾よふ  
 首切してちよの花えよ飽とく  
 酒のまを居くま人の陰よ  
 月花かなくハ酒のむむくハ  
 あま人の山家ふくくく  
 檀のあはくちよふくくくくく  
 同

長虹 津島 雨 枝 嶋 歩 荷 兮 傘 下 薄 芝 心 苗 越 人 野 水 冬 松 冬 文 荷 兮 芭 蕉

ほつれんと陶やものふ水はくはるかな  
 ものの夏月又つらんほつれんと  
 月よふまふ山はほつれんと  
 いまのつきはつらふつら 郭公 釣聖  
 蠟燭のひかりふつら や 蜀魂 越人  
 杉の木のひかりふつら や 時毛 松下  
 跡や先づのつらふつら 聖まの影も 重五  
 ほつれんとつらふつら びつら 柳凡  
 ある人のむらふて夜をせよと有ら統を  
 初めつきはつらふつら 鳥の影 龍潭  
 跡つらふつら つらふつら 落枯  
 跡を真き藤はつらふつら 郭公 一髪  
 三つらふつら つらふつら 同  
 流ふつら  
 わつらふつら 十日わつら 風泉  
 跡つらふつら つらふつら 杏雨  
 あつらふつら つらふつら 傘下  
 つらふつら つらふつら 同

馬と馬よりあひつらふつら  
 つらふつら つらふつら 鈍可  
 つらふつら つらふつら 智月  
 つらふつら つらふつら 李極  
 つらふつら つらふつら 市山  
 月三十句  
 つらふつら つらふつら 梅舌  
 つらふつら つらふつら 市柳  
 つらふつら つらふつら 一雪  
 つらふつら つらふつら 越人  
 つらふつら つらふつら 昌碧  
 つらふつら つらふつら 市柳  
 つらふつら つらふつら 一髪  
 つらふつら つらふつら 長虹  
 つらふつら つらふつら 任他  
 つらふつら つらふつら 龜洞  
 つらふつら つらふつら 越人  
 つらふつら つらふつら 文鱗

名月やういづこもくはれぬ  
昌碧  
名月や敷のたうと犬のら  
二水  
名月のとまえて人の月  
野水

名月の心いそごと

むつろくと月を名る日いたが  
荷兮

い川の海とあをを言れて名也  
同

名月や海とふゆを以て山  
去来

名月やも戸とまをを以て  
烟及

十三夜

名月やも戸とまをを以て  
釣雪

朔日

名月やも戸とまをを以て  
一髪

二日

名月やも戸とまをを以て  
杉風

三日

名月やも戸とまをを以て  
荷兮

夕月夜あんとくはれぬ  
ト枝

四日

夕月夜あんとくはれぬ  
伊豫 一泉

五日

夕月夜あんとくはれぬ  
明奇 鶴声

六日

夕月夜あんとくはれぬ  
岐阜 一髪

七日

夕月夜あんとくはれぬ  
雪二十句

大はな

雪の日は照れくしく顔の色  
其角

いとやうじきふらふらふら  
芭蕉

竹のこもふくよかしく  
塵交

かきつねや雪のあふ山  
加庄

車道ふゆをくさのり  
小春

たつとをてくす顔とほふ  
越人

はの雪ふらぬぬるの毛  
是幸

ちのけのうめわきの一ツが 松 芳  
 くらゐおほい信えこりきり 二水  
 雲の影くさるるふらふら 鳥 仙  
 夜の香おほいぬやう 除 風  
 香のりや川の舟をこころ 警 灯  
 初香やおとあさるるも 命 下  
 雲の江の大舟よりい 芳 川  
 香の物ゆく 桂 文  
 香の香るれやうりや 桂 夕  
 ちくくやほろろかろ 荷 夕  
 と川をやまをふらやう 路 通  
 ほろろ水く 野 水  
 舟のうきこころのふれ 芳 川

歳旦

二りたぬりいせふ花の美 芭 蕉  
 むれ人のあきらめく 古 梵  
 かりあや九千年のけ 風 鈴 軒  
 移りくろい伊勢の家買人 其 角

うめの石連歌ふあはれ 文 録  
 月影のうめあはれ 去 来  
 かさねふあはて年よ 一 品  
 元朝や何となくと 路 通  
 えりいほまきま 笑  
 萬國々梅の系うむ 大 垣 行  
 ふのうとまふい 落 格  
 名もをうらうら 龜 洞  
 伊勢浦や伊勢川 同  
 うさこのまこころ 大 山 昌 碧  
 去ののまこころ 元 廣  
 小梅子葉やひろま 舟 泉  
 ころ男千秋あをな 同  
 心葉ふらうら 重 五  
 松きり川る 釣 雪  
 月影の初雪 同  
 遠くもあはれ 一 井  
 うら白とく 胡 及

えみちえじろや秋玉の年の海  
今物と能く縄や一わしく柳ふ  
はほ能やふらの面りのたぐん  
遠きや舟の通のうんふく川  
佛より柳をくもさきならのま  
際のみやうの目とくいつたらん  
くさくさなうさひもさきなら  
正月の美のりうらや飛ぶまら  
夕このま寂しいうさき困う那  
あひくふ柳れを門もおりうや  
大眼ちき年のまきやれ自う那  
昔の夢さきまはき年とせこ  
傘さし嵐来うらうらうり之方柳  
社まきく柳のまふちるさき美  
くさくさいんさくやうらうらうみ  
嗚るまをさきまはきうらうら  
く川まのりてさきまらう賞さく  
初まは漢名の橋は今のま

長 虹  
荒 弾  
同 水  
と 文  
朴 下  
冬 松  
傘 風  
冬 柳  
防 川  
昌 勝  
夕 道  
梅 台  
野 水  
同 人  
越 人

志のやまの歩踏めくらのまきし  
美威のやまを隣りゆふさき  
己のくやびりのまのあわうの那  
我のま目うらうまのま川毛う那  
あふ式う宿あむあむやうこのま

初春

毛草つむ跡いあを刻細う那  
精やして掃もさきまき草ま  
七うさきさきさきさきさき  
かひく跡く川あめさきりう那  
測濡く杖のゆのま破葉う那  
まきくさおさきさきさき  
石橋くつらさきさき柳おさき  
毛草さきさきさきさきさき  
うまの毛中の舞ふさきさき  
菘さきさきさきさきさき  
梅おさきさきさきさきさき  
毛草さきさきさきさきさき

荷 兮  
同 兮  
同 齋  
貞 室

越 人  
野 水  
俊 似  
小 春  
藤 羅  
素 秋  
玄 察  
鷗 步  
越 人  
落 梧  
一 髮  
冬 松

みのびりとまねつる梅のさうりか 蕉 笠

細代民部の息ふ遠く

梅のあふちやわささふや梅の花 芭 蕉

うらひまのつとこかたる 蕉の影 若 風

ききのつや 屏風うらふ 丘のふもと 云 来

あはれや 夢のささるも 山 陽 籠 桐

さうらふささる 夢を 推らす 一 笑

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢

うらひまのあふ 眠る 路 中 市 柳

さふふさふさ 夢 夢 夢 夢 夢 夢



土橋やよらふもえもつりし 塩車  
川舟やもをのつりつむはりし 冬文  
つりしは中ふもをいりし 青江

蘭亭の主人池ふ露ををせとれり

筆意をあらり

池ふ露の 一 傾きまおふ柳陰 素堂  
風のうり方と移りやあそぶ那 野水  
らももたうしとさゆし柳う那 越人  
ら柳とくあぬるこふりし 一笑  
尺もつりもやとさぬる柳う那 小春  
さつれし柳と風ふりつむ 一笑  
さつりつりて茂とさむる柳う那 昌碧  
さささささの髪の中まぬ柳う 杏雨  
さささささささささささささ 此橋  
さささささささささささささ 杏雨  
さささささささささささささ 松芳  
さささささささささささささ 校遊  
さささささささささささささ 荷分

蝙蝠あそびる月のはれきか 同  
まはるりわらわらしてあそぶ車う那 素秋  
川いさふほくら流しあゆむとれ 鴻歩  
菊のふいふとまゆれとと植あそり 生林

仲春

春のまよふ草のふれうらるる 不悔  
草のまよふ草のふれうらるる 長虹  
わの花のまよふ草のふれうらるる 傘  
草のまよふ草のふれうらるる 清洞  
うらるるるるるるるるるるるる 击来  
万歳とほほほほほほほほほほ 昌碧  
つらつらつらつらつらつらつらつら 越人  
ささささささささささささささ 笑人  
ささささささささささささささ 除風  
ささささささささささささささ 一 橋  
ささささささささささささささ 冬松  
ささささささささささささささ 一 髪  
ささささささささささささささ 野水

あふのこころをさしてくむりくのをききさ  
るるふつをさあつしる 雉子小 除風  
りうらと輪繩解くやる 船字小 塩車  
まどついでふかあたる 遊の舟 山寄 宗鑑  
あつさくろあひぢぬうそ川小 落楯  
いひさくろ岩をさる 岸ののこ川小 越人  
花今くまをいふあひくはつれ 津島 去来  
不図とひてはる下居あたる 遊小 松下  
ゆんやまは板橋ふゆる 遊小 柳井  
その蝶と思のふあをさあひうれ 梅餌  
後欄のまよふとあつてさる 柳餌小 炊玉  
かやまらの中とあつてさる 遊小 百歳  
うねさくちあかしたつてり相嫁  
ハ

暮春

何のきこいつふよまの望うれ 忠知  
ゆわく〜〜ゆわくふらぬを〜ゆま 荷兮  
さうらくくのふらぬゆまみまら 野水

草刈く草刈遠歩を童の那 舟泉  
り棟のとまりゆきぬあさみま 鴉歩  
あし烟の人えるもその塘り那 忍遊  
まけ山や溪のふけさみ 所 大坂 或之  
ほろ〜と山吹らるる 遊のま 芭蕉  
松風ふたす吹らるる 一衣の色 野水  
山吹とくまのまをぬあ〜〜 小 ト 枝  
一〜〜と山吹のま〜ゆ〜ゆら 岐阜 横雪  
あ〜〜と山吹のま〜ゆ〜ゆら 同 蓬雨  
まよひのまのおぬりまを 燕うれ 去来  
りまま〜と山吹のま〜ゆ〜ゆら 長之  
燕の巣を 親〜ゆ〜ゆら 長虹  
ま〜ゆ〜と山吹のま〜ゆ〜ゆら 荒彈  
友滅て 心もろひちやば夜の色 眞藁  
角あ〜〜と山吹のま〜ゆ〜ゆら 蕉三  
ちよら 猿小 び人浦のほ平小 越人

空のふもどくもどく一休もや桃の酒 三輪 傘下  
 人まむふと陸とのふ目午小 三輪 友重  
 山まゆふたささささささささ 三輪 荷分  
 織ねやちうくくくくくくくく 三輪 兼正  
 毎ちふふふのささささささ 三輪 龜洞  
 水ささささささささささささ 三輪 ト枝  
 水ささささささささささささ 三輪 野水  
 りまのあさささささささ 三輪 同

初夏

こゆゆのや白きりゆふゆゆゆ 三輪 踏通  
 更衣襟もささささささ 三輪 傘下  
 こゆゆの刀ゆゆゆゆゆゆ 三輪 龍彈

貞拍老人のゆゆゆゆゆゆ  
 香さささのささささささ  
 としてさのゆゆゆゆゆゆ  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ

聲ふ焼 三輪 荷分  
 山 三輪

ささささささささささ 三輪 芭蕉  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 一井  
 竹のゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 越人  
 切ゆゆのゆゆゆゆゆゆ 三輪 不文  
 若ささささささささささ 三輪 藤薩  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 龜洞  
 ひゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 竹洞  
 ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 鈍可  
 さけゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 夢々  
 とうゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 玄察  
 植ささささささささささ 三輪 生林  
 まゆゆゆゆゆゆゆゆゆ 三輪 作者不知  
 むささささささささささ 三輪 鈍可  
 まささささささささささ 三輪 嵐蘭  
 ささささささささささ 三輪 落松  
 けさささささささささ 三輪 李極  
 大落れるあさささ 三輪 東巡  
 ぶささささささささ 三輪 吉次

阿羅野

涿川の巻

瘡の杖とこゝろくあつぬかしく  
はかしのまにゆかたは川のこも 嵐雪  
野水

仲夏

宵のるのそふくこゝろくあつぬかしく  
川原のまにゆかたは川のこも 楊井  
一髪 元 補

風笛 不交 青江 舍 咭  
ト 枝 鷗 歩

秋 芳 小 春 杏 兩  
一 笑

胡 及 児 竹 此 搗 長 缸 去 来 野 水

一 髮 元 補 風 笛 不 交 青 江 舍 咭 鷗 歩

秋 芳 小 春 杏 兩 一 笑

胡 及 児 竹 此 搗 長 缸 去 来 野 水

藤の杖とこゝろくあつぬかしく  
沙江く藤の杖とこゝろくあつぬかしく  
足伸くく姫百合をわらわらと  
竹の子ふり焼きさけくまうりりり  
筆の付よりある一ちの竹  
ささきとこゝろくあつぬかしく  
お月る小新きとまもる 汀う那 大津  
こねはの小粒ふちりぬ六月る 尚 白  
お月る小新きとまもる 毒 洞  
お月る小新きとまもる 眞 室  
おとろくあつぬかしく 芭 蕉  
おとろくあつぬかしく 荷 台  
おとろくあつぬかしく 越 人  
おとろくあつぬかしく 淳 児

曲江小舟のええぬうらみうら  
 鴨の葉のふんぞりあるいづれ  
 松の海とえくさる夏降の雨  
 虹の根とくは原の中の穂  
 蒲の花や流ふとくさる宵の  
 冷やや海結る人とうらむら  
 夏の夜やとくさる不慮の  
 菖の苗守ふ

其角 芭蕉 野水 借雪 市柳 長虹 昌碧 野水

暮夏

夕まふ干傘ぬきく 塩粒の那  
 夕まふ小橋中やらぬ 赤松小  
 涼まふ白南なうら 入日うけ  
 涼まふや宵のまゆり口  
 夕まふのゆあけうらぬらうら  
 おかまのふふまきうら 津島  
 飛石の石流や葉のトまきみ  
 涼まふや樓の下やうらぬら  
 飛石のとくさるうらうら 舟  
 夕まふとくさるうらうら 川を  
 吹ちまふとくさるうらうら 松坂  
 遠まふじりやうらうら 松坂  
 遠まふとくさるうらうら 古梵  
 河岸うらまのやまきうらうら 芙水  
 夕まふとくさるうらうら 長虹  
 ままきうらうら 沙干の沖の流るら 俊似  
 連あゆむとくさるうらうら 文瀾  
 川まふとくさるうらうら 潦月

傘下 去来 荷方 同 如風 俊似 全 枝 未學 秀正 晨風 古梵 芙水 長虹 俊似 文瀾 潦月

如とけりい後賞をそり信あり  
 尚白  
 一髪  
 下枝  
 李晨  
 遊人  
 素堂  
 練のたぐいしく蘭ふゆるふ

初秋

ちくちく麻刈あとの秋の風  
 越人  
 楳のまゆやあつ川うつくし秋の風  
 圓解

松嶋雲居の青あし

一とよまききりしゆきそくりし  
 仙化  
 うとあらのちりしゆ秋の夕きき  
 津島  
 方生  
 杏雨  
 芭蕉  
 文鯨  
 荷兮  
 あさふの白きいあふくそぬせ

子と守るものよいし海の白あつし  
 同

降れるおろしやゆふらつーとそ  
 鷗歩  
 あさふほやゆきこのみおる月  
 胡及  
 まゆのけふふものつやや雲の香  
 龍彈  
 松風や志らさのう小法をらん  
 去来  
 深しそなをふより海越の那  
 昌長  
 野道くま物まうるゆきそりれ  
 警灯  
 まつじいひあつる海よりゆあつり  
 一髪  
 きりしゆとけきききとてゆきそり  
 素秋  
 あれそふ橋まを結たつりうゆ  
 芭蕉  
 ゆらつまやきのよ東々入る西  
 其角  
 ふま流てんまわつらうや秋の光  
 舟泉  
 ひまらつーとけききとてゆきそり  
 芭蕉  
 欄つらとてあさひきき葡萄が  
 作者不知  
 草とらつーとけききとてゆきそり  
 伏見  
 任口  
 ちとそりてく常鳩をたつる為が  
 荷兮  
 けん人や鳩くそまらんひびく為  
 堀及  
 宗徳法師のこまゆふよとそり  
 素堂

とくくつらねふさぎと暮らふ時 俊

仲秋

如雪のふ馬のとまうらり秋の音 芭蕉  
 つらくと儚とこころ秋の庵のうな 加賀 小春  
 谷川や茶臼袋とくく秋の音 津山 益音  
 石切のきとすけり蝶のこま 傘下  
 奔のねや梅垣りるあまれとれ 一枝  
 糸のきよ人の息とるゆいハハ 伊豫 一髪  
 田と畑とひらく水と心とあま 伊豫 一泉  
 山姥の糸とつらとくく 伊豫 重五  
 石まふりたるとくく酒の畑 其角  
 ちんちんとむのひとる 伊豫 東順  
 藪の中ふ 伊豫 林斧  
 とくく 伊豫 越水  
 かつ 伊豫 宗和  
 初め 伊豫 北枝  
 素堂 伊豫

ともとのさきのぬきつらとくく 伊豫 越人  
 一草の草の穂 伊豫 防川  
 ねのふふ 伊豫 舟泉  
 ちんちんと 伊豫 胡及  
 んちんちんと 伊豫 曉龜  
 圓 伊豫 其角  
 ちんちんと 伊豫

暮秋

ちんちんと 伊豫 芭蕉  
 ちんちんと 伊豫 一笑  
 ちんちんと 伊豫 昌碧  
 ちんちんと 伊豫 越人  
 ちんちんと 伊豫 曉龜  
 ちんちんと 伊豫 其角

きくのそり畑の人や驚く帽子 其  
 かねたうて葉作らうとていふ人  
 加なうて若き人 赤松の塔伊豫 千園  
 麻環州の文蔵の伝説の夕 芦  
 赤の葉ののこすち枝や梅のき  
 茅の穂やまのくきうちのほれ  
 路通

初冬

あきつものまね〜〜の時ふ  
 系方の人ふやき〜〜  
 一ねして三井さう〜〜の志と  
 といふこれ何おひ出すこの夕  
 湖春  
 尚白  
 端水

万句真形よ

えさうさう人枝やうりの時ふ  
 人をほらうらうら  
 今朝の枝やうらうらさるる  
 梅の心のほれさうさう  
 三〜〜さうさうさうの時ふ  
 二〜〜二日の日のさうさう  
 荷兮  
 落梧  
 牧王  
 傘下  
 荷兮

一葉のひく柿の葉ふれふたうら  
 このさう〜〜時ふ〜〜を問はさ  
 枇杷の花人のさうさうさう  
 茶の葉はわのつらふさうさう  
 和の花さうさうさうさう  
 善ののい〜〜さうさう  
 妻さうさうさうさうさう  
 の〜〜やさうさうさう  
 滝のの〜〜さうさうさう  
 石向の〜〜さうさうさう  
 さうさうさうさうさう  
 何〜〜さうさうさう  
 道地の〜〜さうさう  
 妻さうさうさうさう  
 さうさうさうさうさう  
 雪ののさうさうさう  
 蕉  
 一 井  
 落 梧  
 胡 及  
 文 鱗  
 ト 枝  
 洞 雪  
 一 髪  
 松 芳  
 杏 兩  
 蕉 並

寒月



煙とぬく夜く月を白き  
あき候の大根あふふ根のり  
俊似

仲冬

おうたれく後志のりれる春ふり  
去る風つきてたてしる霰うね  
林芥  
宗之  
勝吉  
除風  
夜舟

兼題雪舟

晴より雪ふきおつと陸ふり  
ぬつたりと雪ふきおつと陸ふり  
長虹  
一井

雪舟のりやゆびりちよふとてぬる  
つきてぬくねらふと雪ふのり  
忠知  
亀洞  
村俊

井と揚々老い六日雪く弟修く  
ととといわ裸うたう

汗とて雪ふ突らむと雪ふ  
海荒勝の雪だく雪ふ  
利重  
亀洞  
塩車  
一笑  
芭蕉

歳暮

餅つとや肉ふむとまほく  
おまほくとよめぬりのあり年の雪  
野水

まろくく備つゝゝる葉細くは 竜洞  
蝶くらし梅ふさげゝる 飛の那 一 髪

本名の得てゝゝ人のふけり  
として行のふえいゝつねゝる羊の暮  
まてゝしかりゝをかゝりよせんと

とくはれ行の實一川くゝと 荷兮  
門松とくゝく 蛤一着ひ 内習  
田ゆゝ花遠くゝ花のまきさし 龜洞

年中行夏内十二句

供磨蕨白散

荷兮

いとけちやとゝゝあゝおる人夜舟

春日祭

とくゝふも店の後のはらゝか

石清水臨時祭

宵音とゝつゝふゝゝゝゝゝゝ

灌佛

まゝのりやつゝゝふはゝゝ佛蓮

端午

ねの腰く葵付ゝゝの髪落

施米

うらゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

乞巧奠

まゝ葉のり七夕ゝゝゝゝゝゝ

駒迎

爪髪を毛鹿のさゝゝゝや物ひ

撰出

葉のまやゝゝのゝれゝゝゝゝ

十月更衣

おゝきの衣のゝゝゝゝゝゝ

五節

糸船ふまゝゝゝ指をたゝゝゝ

遊懶

おゝ統てや眼ふゝゝゝゝ鬼の面

詩題十六句

野水

今日不知誰計會

春風春水一時來

少中一派のまゝとれるまの風  
白片落梅浮澗水

あまのそとふけくる梅白し  
春來無伴閑遊少

花下忘帰因美景

春入なまものけきせよ花の下  
留春春不留春歸人寂寞

りまのそとろくろの野のつら  
巖風吹袂衣不寒復不熱

餘暖は松の影のふりこぼる  
池晚蓮芳謝

甚のまをりあまのまをり  
暑月貪家何處有客

來唯贈北窓風

あまのそと切あきふりふの窓  
大底四時心愁苦就中腸断是秋天

香の流るるらていなり秋の夜

夜來風雨後秋氣飒然新

秋の多てれて瓜よふんわたり  
遅々鐘鼓初長夜

耿耿星河欲曙天

つとまのりひとまのりあうておそまに  
残影燈閑墻斜光月穿牖

霜降や流るる白ふまのり月  
万物秋霜能壞色

白菊やまをりてんじと秋の香  
十月江南天氣好

可憐冬景似春美

ここのこまをり身づくやをり  
寂寞深村夜残鴈雪中聞

ゆきまのこまをりひらや香の居  
白頭夜礼佛名經

佛名の礼り獨懐く白髪小  
彈弓の撥ひのこまをり

ささくふとくく

鋸鏝目立

舟泉

かきゆふの夕日ふとくくつらうか

付木突

わ月園くま影ていなる人の家

鉤瓶繩打

かきゆふはのくふよる秋の里

糊賣

あさあつのくまうおらむつてり

馬糞搔

くろりーのねのまうことつまて

李夫人

越人

魂在何許香煙引到焚香處

わけうふの抱はくをわつくろりぬれ

楊貴妃

雲髻半偏新睡覺

花冠不整下堂來

くろりぬれまゆゆくくくくくくく

昭陽人

小頭鞋履窄衣裳青黛點眉

眉細長外人不見々應笑

ゆのぬきやびうーのまのほくろん

西施

宮中拾得娥眉芥不獻吾

君是愛君

たなうくく樹のくくく牡丹か

玉脂君

玉貌風沙勝畫圖

よのふもまきれぬまの柳か

一日あまをまうくくくく

卯

あまのゆふの佛供焼ちふまのり

辰

たなうくくゆふのまう日之那

巳

薄秋の曉くふつくくく

午

ああひよき千よと踏まるとも

未

蟬のきよ武家の夕合ふらふら

申

お月るや鶴とまうらちの雀を

山

あふあふと生とまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

○何羅野

午

ああひよき千よと踏まるとも

未

蟬のきよ武家の夕合ふらふら

申

お月るや鶴とまうらちの雀を

山

あふあふと生とまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

野鳥の上よとまうらちの雀を

野鳥

○何羅野

つたのつらうひりれきうくく 荒 彈

山岩

おくひのあかり減るつきの角 湍 水

海岩

若さうし海やと玉のつらうくろ 全

名所

ひまのつらと奥とこえのつら田か 杜 岡

あゝ矢の背や式部の大江山 荷 兮

かく松花松々花より暇なく 芭 蕉

葉一把くくく花をる河原もか 湍 水

花嫁までいふのあやもぬ花堂 荷 兮

琵琶橋眺望

香ある鬼獄さびさば生か 舍 帖

園をえてまことあゝうくくく 宗 祇 法師

美濃園園とつたの字

若のつらうとてつらうくくく

まゆあて布子賣とて更 夜 杜 因

まうのや切かかれき志笑の里 重 五

わもあふうれぬものや津田の橋 芭 蕉

湖のあまきりくさふ月雨 去 来

牛のあゝあゝあゝあゝの六月夜 一 髪

角田川山々

つこのれれ流儀の故今ひふ林香 貞 室

みよーゆーゆーふ秋之貝の音 破 笠

とよひゆきゆきゆきゆきの秋小 芭 蕉

夕月や枝ふあまうる角田川 越 人

九月十三夜

あまふあまふあゝあゝの月とてよ 素 堂

鴨突のるやうとてまね田々 胡 及

鴨突の草花のあゝのしるこ 洲 支

武蔵のやゝゝあゝとてる時西 舟 泉

湖をなげくゝえんじり 向 白

かゝ橋やらまうあそをくおらま 随 友

むくくゆきゆきゆきゆきのあゝ 洗 悪

あゝあゝあゝあゝあゝあゝの奥 俊 似

あゝあゝの箱庭や山竹の奥 津 島 一 笑

雲のふりまらなつ川よりくれり  
よりの心唯大雪の夕のちよ  
早霧のやうを名もくや雪ふも  
あふの目やあけの小丸の雫くらひ

旅

き霜よりよふやけらふ津の那  
芭蕉

大和國平尾村より

花の蔭陰ふ似ゆる藤を藤の那  
桜さく里を眠こくきうららこ  
日の入やあふんくり梅の花  
のくくや凌のまきりせきこふ  
いし川流く流ふゆぬ夜くへ

あゝ人の暇列よ

かききけあきくくくくくく  
まららめり食くく空を以毎き  
あそくらけらふあめり徳原が  
あひるや村目とあそ市の夜  
夕まよりの人まの一本は松

湍水 野水 芭蕉 如行 芭蕉 全 夕楓 一髪 荷分 芭蕉 除風 冬松 昌碧 松芳 傘下

芭蕉子と送る

梅まふてしつをくくく別う那  
あきくくく秋の  
秋風ふくく秋の  
わのきう那  
わのくくく秋の  
わのきう那  
あきくくく秋の  
わのきう那  
あきくくく秋の  
わのきう那

我人徳之りより

文海の月と二人ふこらまけり  
なかり根長つ名よるのうへ  
おくらつわつわつわつわつわつ  
あきくくく秋の  
わのきう那  
あきくくく秋の  
わのきう那  
あきくくく秋の  
わのきう那  
あきくくく秋の  
わのきう那

河内野

釣雪 一井 野水 芭蕉 路通 荷分 ちさ 玄察 一井

ほろろの暮をわづきの秋の香 文鱗  
多ねたと思ふくくくくよりの香 芭蕉  
膝なまぬ刀くくくくくくくくく 常秀

津島

いづれもふくくくくくくくくくく 荷兮  
多ふえくくくくくくくくくくく 野水

其角ふわりのくくく

あゝあゝくくくくくくくくくく 荷兮  
多れてくくくくくくくくくく 越人  
くくくくくくくくくくくくく 傘下  
里人のくくくくくくくくくく 宗因

越人と吉田の譯くく

多れと誰と二人膝なまぬのくく 芭蕉  
膝なまぬくくくくくくくくく 全

述懐

叶名と終くくくく

きくくくくくくくくくくくく 路通  
多と指守くくくくくくくくく 快宜

余はの田北陸入ぬと浮せうね 落格

高野くく

多るくくくくくくくくくく 杜國  
梅舌

高野くく

又母の志くくくくくくくく 芭蕉  
らめくくくくくくくくくく 荷兮

さくくく入湯をくくくくくく 全  
くくくくくくくくくくくく 杏雨

くくくくくくくくくくくく 杉風  
似あそくくくくくくくくく 魚洞

九月十日宗堂の書くく

かくれのやとめまの巾くくく 嵐雪  
くくくくくくくくくくくく 曉龍

人のくくくくくくく

はくくくくくくくくくくく 芭蕉

旧里の人くくくくく

くくくくくくくくくくくく 杜國

阿羅野



鎌倉建長寺小まうりて

あそむつゝもはばねたふらふて 越人

らう人のむねより名もあそむ

あそむと一籠ねらうら抗く

あそむとあそむらう焼をほこり 荷兮

あそむのりらふあそむ

たらしまの噴浦やかへたのそと 荒弾

櫛のちふ鏡ふもさるはほつり 去来

目やまらう耳やらうらうのそと 西武

あそむと肺の結ふほこりのそと 芭蕉

はあそむのそとをわりのそと 除風

老とまらうそとてあそむあそむらう

あそむやあそむらうらうらう 越人

意

あそむらうあそむ人のあそむらう <sup>伊勢</sup>一有妻

あそむらうあそむのそとらうらう 除風

あそむらうあそむらうらうらうらう 長虹

あそむの目らうの枕ふらうらう 文欄

唐平小少将名てらるかの那 冬文  
さしけり一妹のほひはあそむらう 心棘

六宮粉黛無顔色

宵雪の宿あはれまや舟の糸 長虹

一もくろく人ほのあそむらうらう 尚白

さしけり一妹のほひ

つまねらうあそむらうらう 荷兮

あそむらうあそむらうらう 小春

あそむのそとあそむらうらう 越人

松の甲あそむらうのそとらう 俊似

あそむのそとあそむらうらう 舟泉

あそむのそとあそむらうらう 嵐叢

あそむのそとあそむらうらう 山廻

あそむのそとあそむらうらう 松芳

あそむのそとあそむらうらう 冬松

あそむのそとあそむらうらう 昌碧

無常

末期了

あそむのそとあそむらうらう 守武

無常迅速

嗚らぬいりしきりけりし鳥か 傘下

末期了

蘭をやはやく有明のほろろを 元順

松坂の浮瓢とらふ人のせまら

くまふいひやうら

櫛のきりぬきぬきをうらうら 荷今

いむらこの遊草よ

ものうらふのれいへく消るるを 去來

何人ふらしたるけつる射すき

何くまたの山嵐とんやちきりか 荷今

世とともく妻の身はうらうら

あはれ月の相のつよとやわらけ 野水

辞世

あまをせせ灯籠のしよ主コ翁

あふおらけたうら

ぬく顔のあはれもせきせん一躍り 落枯

一原野やう

ゆきあや小町く昔のそとよま 釣雪

妻の遊草う

とこれいしそこの里人それいひ 自説

季を下妻のこまうらしとて

秘らまをやくくひえけかぬらし 去來

ユ泳身まうし後

その人の斬るなり秋のそと 其角

おあふくれらう子のきれ

とこれあやひらり合はれ秋のそと 尚白

何人の遊草よ

何れもまゆやもまゆの息をき 芭蕉

膝うらみまうらうら人を

あつきののくくめうらふ消ふらう 荒弾

もまき路のうらや念佛のそとの春

釋教

伊勢やう

神宮やらひのそとを淫染後 芭蕉

有るくあるおはうらうらむらむら 荒弾

西行上人五百歳忌小

と川きりりとわが舟あはる 櫻うね 荷兮  
おぬくをさるふ

連翹やまを日と志をれりし 胡及

うて着ふ蟻のまわりくる二玉小 松芳

本居ましく傍も有るりるの花 杜園

はつらひとをく報く糸のち 冬松

花小個借りて燈ん塔さうれ 其角

貞享つらの之辰の歳除生一日

東照宮の別當僧正の法座小慈恵

大師近座執事法華八講の法をききた

散花のるいじりてぬりてぬ 越人

女房の柱すねとそとくは屋をれり

啼きあめり龍女成佛の事ふりてきた

ひあつと鼻うむ声の毛をきき 全

ほろりとふるるたのこや魚ひの玉 俊似

鏡多の尾上のゆりてゆふりて

古寺やつらぬうひの葉草 一井

八景ありて

海女の歌をよみむらむらむら 十関

啼きあめり龍女成佛の事ふりてきた 一井

まふまふ

灌佛のりふせは統をふ麻子小 芭蕉

灌佛のそははははははははは 尚白

その節々

海のあつと龍女成佛の事ふりてきた 一雪

十如是

おのつらなうれて通るうらむら 荷兮

即身即佛

夏陽の豆を煮い深人の佛うね 愚益

ほろりとや傍の燈をともす夜を 鼠彈

おもしろや門をあつとくは藤原冠帽 荷兮

おもしろの火をとらむひのうね 探丸

石室小施職鬼の御のこつきのり 文里  
魂空舟より酒をよむ向亭別 龜洞  
たまはつりらんふとある此葉や ト枝  
松栂のこころをそん松の産 釣雪

平等施一切

松竹よりこころをよむとまらり 俊似  
福多ふ大佛よりむ聖中少 荷兮  
松栂より引導歌くそまはか ト枝

ある人四州の事知ありとてら訪し  
新くと石舎不圖をんを感し  
あり居とらしとす

居らぬを佛よりたらしめぬそ 荷兮  
ある寺の奥りふ

堪と由寺の教よりそらうそ 其角  
まこと知く塔とさうや月の子 一井  
神のまよふ本佛さうする法作ト 枝  
人ののまよふあつとてらむとてら  
ふまことまこれとてら

夜をそく又たれしとらう一時 有 飛彈

鎌倉の安國論寺にて

ふふとまの浪やあらしあらしむ 越入

古寺の雪

暖色伽藍くくの雪見とひ 荷兮

同

雪のりやこころをよむ二玉の丘 俊似

つくりをそくこころをよむ雪の 一井

新葉をそく人のまらりや神とま 文潤

千観うまわつせつ一年のこれ 其角

葉玉品七句

如寒者得火

まらふふまらふまらふまらふ 胡及

如禄者得夜

雪のりや湯をたぐらんまのま

如高人得主

双六のおまよふまらむつらうそ

如子得母

竹まゝかきこもつてけけけ

如渡得船

ものころ隣の橋の根をきつてやうり

如病得醫

いゝいゝ病はあつてはやくいゝ

如暗得燈

秋のお夜あつてはあつてはあつて

神祇

たつたやあつてはあつてはあつて

二月十五日(祭日)

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

おまけにやあつてはあつてはあつて

- 釣雪
- 荷分
- 全
- 龜洞
- 昌碧
- 釣雪
- 越人
- 舟泉
- 雨桐

門あつて梅の湯籠をのみにあつて

梅あつて人の後のさつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

若宮奉納

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

あつてはあつてはあつてはあつて

- 重五
- 玄察
- 鈍可
- 李挑
- 好葉
- 玄察
- 龜洞
- 未学
- 荷分
- 尚白
- 松芳
- 落梧
- 利重
- 野水
- 昌碧
- 村俊
- ト枝

祝

肩付といふふたりぬきふく 冬文

荷字四十のまふ

齊まを竹まきふんぬるれ 重五

若う代やううくまれきまつて 越人

まきい何れもやう抗沖の石 傘下

いこい海夢のよふ杖つらむ 亀洞

ふ代の子あふふまういこま 同

まをいこれあまふまき

ま役く物とふのまことり 芭蕉

曠野集貞外

維うまをいひまをうらむを流う市甲ふ

いづく朝のまきまことんぬる東四明

北麓ふ有くたのうらういらまをを

まをいこ佐川田森六のうらうのふあこ

あくといまをまをうらう人す又

まをい一尾くまをいわをま

は勾尾陽の折ふまの他とて芭蕉翁

の傍へをまをうらふす一ふはの川

田野へ居とうらうてまをいほを感す

びうあまを有る人の甲ふ虎の物信

ちふらうらふ進をれうらうあをそせ

色とまをいこまをい一旗のひらふつ

らまをいこまをい一様とまをい實

にらる三色のまをいこまをい實の

字老杜のまをいこまをいやねるのま

まをいこ

まをいこまをいこまをいこまをいこ 素堂

これ文人のこころつらつらとくくせられ  
と三人寝て夢をみけり

ほととぎすかきけきまのうけはく 野水  
 橋の踏とまともふまのまろく 荷兮  
 かのま何うあまるおこりあうと 越人  
 門の名月待園のやまろひく  
 風の月利と袖秋のま  
 武士の巻きつ山いかに道  
 志まろふついで波の鳴る音  
 空より経よりおもきまのう  
 ばやてうられくろくむくむ  
 まつり松竹真まろくまの橋  
 千句いねむむ山めてら  
 境さろく一ま揺も咲はり  
 あてこいかなと夕月ねく飛  
 香の身は泥のゆるるおろひ  
 秋とまろく登人のま  
 鳴るやら西と東と境の声

水人兮水人兮水人兮水人兮水人兮

さびうなりくる利根の川舟  
 水の目だてろくくくくくくく  
 承りりりりりりりりりりりり  
 ふろくくくきのふの市の燈いれ  
 狐くくく人の入るる森  
 柏木の御気の比のつりくく  
 さくやくくくくくくくくく  
 月の光より今ふろくくく相撲  
 秋よあちより里の酒とま  
 香くくく歩歩鶴ふ出るまろく  
 うれくくくあふむ波のま 地  
 かくくくく謙下候くくくく  
 火箸のまゆくくくあつこ  
 くくくくくくくくくくくく  
 多せきくくくくくくくく  
 花くくくく都をいまくくく定ら守  
 控くくくくくま加帳くく架  
 墨くくくくくくくくくくく

水人兮水人兮水人兮水人兮水人兮

大根とささし干小のくし 兮

を後や後ふあまを刺して 龜洞

はるの舟なる酒のちさき 荷兮

のくくやふく酒ふをを解く 昌碧

百足の懼るまきとさけ 野水

夕月のまきの白さとち流 舟泉

あまのの藎と旅く月まき 釣雪

旅のまきとまきくぬ新まき 筆

一筋さししてさしと吉 綿 龜洞

るのまきふまきくくまき 荷兮

来まきふくおひま 昌碧

いづつもあまてめくくまき 釣雪

湯後まわくの木あまの也 舟泉

流くやとまきしてく 野水

たらくまきくや 荷兮

秋風く如車の藎ととと 龜洞

独をまきとく 釣雪

付ふむのくくくをぬえのま 昌碧  
 ハま山吹ををくちかきく 野水  
 日のくくやくくは何せんはくく 舟泉  
 んやまきくふ上りくくま 龜洞  
 向まき実やまほまの少あて 荷兮  
 垢離かく人のまきの此まき 昌碧  
 配所あく干奥の加減まき 釣雪  
 まきくくくくまきのあまき 舟泉  
 むくおよむのひつまきく亦勝り 野水  
 口まきくかまきまよふまき 荷兮  
 いづもてまき所のまきまき 龜洞  
 やりひまきくくまきまき 釣雪  
 まきまきまきまきのまきのま 昌碧  
 やまの秋の中まきあまき 野水  
 つまきまきまきまきのまきのま 舟泉  
 まきまきまきまきのまきのま 龜洞  
 夏のりやまきまきのまきのま 荷兮  
 桶のくくくまきまきまき 昌碧



人なまふ旅先くして花ふり  
ついとくくふある精進 野 釣 雪

若しき嫩うきくつと夫の水 舟 泉

柳のうららけのまきりの卵 松 芳

夕うけの深おろそくくらん 冬 文

くふくきやうくくく月夜 荷 兮

秋葉のそとをくくくく 松 芳

うららきくくく 橋 角 力 こそ 舟 泉

きくくくくくくくくくく 荷 兮

くまよくく砂の中のあはえし 冬 文

火氣の皮の衣とくくくきて 舟 泉

後えせーとくくくくく 松 芳

くくくくくくくくくく 冬 文

風の半くくくくくく 荷 兮

貴幸とぬれぬせけくくく 松 芳

よきて双紙の繪とまよくく 舟 泉

ぢあるくくくくくくく 荷 兮

月のおしろや花を井の底 冬 文

灯くくくくくくくくく 舟 泉

珠敷くくくくくくく 松 芳

陸辰くくくくくくく 冬 文

十日のきくくくくく 荷 兮

山守の秋くくくくく 松 芳

長持買くくくくく 舟 泉

どぶくくくくくくく 荷 兮

馬のくくくくくく 冬 文

さゆくくくく 舟 泉

遠ふくくくく 松 芳

つくくくく 冬 文

あつくくくく 荷 兮

けーのたぐくく 松 芳

味管くくく 舟 泉

まろ谷のくくく 荷 兮

次くくく 冬 文

美の鈴赤貝くく 舟 泉

秋もふりくる花の結ももろ  
きさらきな瀑布をひらおきて  
さら面白き山くららの夜  
冬文 荷兮

ほろろの光を待ぬ月の影ありて  
るのちをふととて戸の口  
河津一車ハ琵琶のかこきつて  
あつさうぬらゆ人のうらみの  
月の秋影のささふゆらあり  
一荷にふゆ一葉のきくくちや  
おあつてつせの寮の湯をた  
葉細ふむれとよそりのをさう  
土肥と夕くふつとよせく  
官判おとせ神をわのうき  
通舟のついでとてけつたう  
六倍ふあつとささのうらとさ  
代もわつとささのうらとさ  
淡き黄より銀一ふ

舟の影を待ぬ月の影ありて  
花咲くうらとてふまをわたり  
天仙夢ふ冷食あつて夫の言  
うきかひうけく者経の中  
たつたあつてお物らうらとさ  
夕せとつてきつてついてや  
弱のやとつてつてつてつて  
秋のあつとつて昔津羽橋  
あつてつてつてつてつて  
八日の月のささとつてつて  
山の端ふおとつてつてつて  
きつてつてつてつてつて  
異をさる暖うきとつてつて  
太鼓たつたつて踏子つてつて  
ころりつてつてつてつて  
きたつてつてつてつて  
息あつてつてつてつて  
庭とつてつてつてつて

○頁外

三方の敷じりうしちゆくふる  
伏奉の草菴と茶くもきこらみ  
陵くや小塔大東塔の瓦  
人ねらふゆくはるの川岸

水 全 筆 兮

月一のちいさな星のまじり

おもしろおのりうらみ柄とけしん

よた園の宗徳法師ののりまじり

おもしろおのりの庭しりあうり

流しやまきつらぬ

月ふ柄をこころよきと園うぬ

おのりうらみおのねの庭

そらうらと流るるまじりうら

おのりうらまじりうらまじり

まじりうらまじりうらまじり

後のまじりうらまじり

おのりまじりうらまじり

まじりまじりうらまじり

越 傘

人 全 下 傘 全 人 全 下

とてやうらまじりうらまじり  
まじりおのりうらまじり  
大勢の人ふ法華とこれこれ  
月の方へうらまじり  
冷く入柄とまじり  
秋のうらまじり  
わらまじりうらまじり  
森あうらまじり  
花のまじりうらまじり  
まじりうらまじり  
うらまじりうらまじり  
月をうらまじり  
酔さまじりうらまじり  
たまじりうらまじり  
音合柄とまじり  
まじりうらまじり  
灯臺のまじり  
的とおまじり

人 全 下 全 人 全 下 全 人 全 下 全 人 全 下 全 人 全 下

○頁外



遠くきり龍のあるく定申う  
 垣かのくけあいにほきく  
 あやうくにけく人嫌の夕なりを  
 けはきいたるわきくつむと  
 が月のうそのまよてほきくふ  
 破とまきく語くいぬくつと  
 秋の田とからせぬかまのまふそ  
 さいしくなるうう文字同ふく  
 いうりく尾鹿の本葉を  
 馳をまらふの瘦くうひわき  
 花のはげ茂とまきくうらやま  
 田よりと答く暗きくくら

か翁よ伴なをまきくまき人の

まきりうきふ

あまふあまの文や天は馬

三おさこの月をそまきりうら

まき秋のくをまきくまきと行つら

其角

越人

全

人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉 人 蕉

飲くくまきくく茶いあふなる  
 けりうまきく振ふくけくまき衣  
 蓋きまきくあまきくあまきく後  
 恨くまきく涙まきくくくまきく  
 静水あまきく深とまきくむる  
 空蟬の舞魂のけのむそりき  
 何とあまきりける金二万あ  
 いまきりまきくと他人まきり  
 やけとあまきりてえくつふく  
 酒熱さまきりてくくくくまきと  
 奥とくつらぬ舟のけの舟  
 そまきりうのまきりいれまきり  
 花とまきりくまきり草の一穂  
 饅頭とまきりくまきり神よ色まきり  
 うまきり世あつらく死あまきり損  
 西王母東方朔も同ふくえま  
 ようや鸚鵡の舌のくくくまきり  
 あまきりまきりあまきりまきり

○貞外

角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角 全 人 全 角





一里の炭賣りの門をこめて  
 かまひの先は龍少茶朝  
 ささくはや正木を引おぼん  
 肩をたぐひを酒よあふ人  
 夕月の入きく早き旋きく  
 たくく小餅とつのもこむ秋  
 里ふくく確あかり二三日  
 亥司く素くあられまてく  
 問をたぐる涙くおの言あれた  
 昔籠くく切ほくく文  
 うりくく存記ちくく場とわす  
 をゆく杖半の職の雲 鋤  
 かつてくくよんりあひて六打家  
 輪とてくく女中ちりり  
 浦風小控ふきまらる月係し  
 みくくくくく記淨の魂を  
 ぶ老のくくくくくくくくく  
 森くくくくくくくくくく

一井  
 龍 鼠 一 鼠 長 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠  
 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈

はらのくれあつてくくくくくく  
 紙子の綿の裾くくくくく  
 くれくくくくくくくくくく  
 くらあつてくくくくくく  
 秤くくくくくくくくく  
 比まふりくくくくくく  
 ゆくくくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくくく  
 こくくくくくくくくくく  
 歩み縁入道の美のくくく  
 衣くくくくくくくくく  
 毒くくくくくくくくく  
 斤風くくくくくくくく  
 極くくくくくくくくく  
 ちくくくくくくくくく  
 ぬくくくくくくくくく  
 石くくくくくくくくく

胡 長 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠 一 鼠  
 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈 井 及 彈

○貞外



炭俵序

此集と撰める孤を野坡利牛らに常小  
 芭蕉の軒より竹のよひ尾の窓をひ  
 らき心の泉とくみたるく十あまり  
 かりのふきの野風をそけはあつ家  
 車也我流をいかにたつ河をませむ  
 らぬ二三子もふゆく大橋より一  
 とおる守庵をこれふはをほとけ宋人  
 のも亀まゝとていへる葉をたしんや  
 まはれ、お着ふ橋のさくゆらりと世をふ  
 おき横ふかりつゝ今集の社のたまま  
 をおととちよりまわいひつゝおのこ  
 ころ毎ふ入はしくゆうつゝのあやのあ  
 とこの是も魂のまゝとていへるやこそ  
 とおひとほるの甲ののりてあつて秋  
 のゆふりつゝつてつてや、今集の巻を  
 て竟ふらぬちを二またふつゝあつて  
 らぬるよ、有色のほろりていへるやこそ

○炭俵



町元の清らりと酔く花の陰  
門く押さく壬生の念佛  
赤風のせよふ雲ののきんを吹きて  
もく居るまふ小朧や川らぬ  
江戸のたぢぢうの暮をせられて  
こらカドワレとつらつらと  
方々ふ十枚の肉のくひの春  
相のあさく月さゆるあふ  
門さちくもつておつて面白  
ひらふと合て表のくさる  
この午ふ女房のあやと振舞て  
又このころ色味ぬ座人  
法衣の湯衣と送るたさうり  
繩ととりくくまのゆま  
この家もあの方ふ家とあけ  
真ふ答あくくまの雑炊  
ふも鳴一ねくくあまうらり  
未まの雪のとしてぬ茶用

野坡 芭蕉 全 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉 野坡 芭蕉

隣をとも知らせを疎とつれよと  
展風の清らくともなる葉ふさ

三吟

蕙好と遊かりるを花さうり  
あさみや首了雀籠とらる  
斤道々まの少飯のくまうて  
外とらまく小冊入相撲場  
細くと朝日さうりの宵の月  
早稲の晩摘と相せふおる  
泥降とまき流るうのを底らん  
河ちそらとれい屋のうらうり  
隣りくさうと跡をさふまある  
てまうくくくもさうらういわり  
尾谷のくちく多修を護院  
お百のうけと二ふ山をらうり  
洞あさこのわのたある音のと  
人のくくらぬねらうらむさうり

嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪

○炭俵

新設の靴とむせと日くられて  
阪の中なる芋と厚る内  
瀬とる沼やうゝあまの外  
新設みくく又斬のく  
ままのくさかふまぬく  
抱揚るるの小便とせぬ  
くさくさくさ何日のあつたを  
ゆきゆき暑のせんく  
響くあま娘のせとあまの  
くさくさ何とせぬとせぬ  
産佛の細くはきとせぬ  
此ういとのふるくこれよる  
桑の穂はけく風よ吹例に  
る場の喧嘩の泣よまむ月  
月とせぬくくわてんあま  
今う産屋のくらわとせぬ  
賣あまゆりてせぬたに証  
ひりりくとせぬのあまゆり

野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛 野坡 嵐雪 利牛

獲食の役きくせく走らざる  
うくまのきくまぬ細川  
棟のあまをせぬ花の夜  
まくういのくさく正月の深

野坡 嵐雪 利牛 野坡

あつ川ふまのりく

空豆の危き少くく妻の塚  
危のくさく危のくさく梅川  
と浪とせぬあまほくのる落て  
そのくさくけく酒の家の中  
産あまの産あまのあまの月  
とせぬとせぬのころく秋風  
あつくくま茶のくさくあつく  
屋のけくまのふままるあつ  
妹とまのあまのくさくわらわら  
傍那のくさくくまのくさくや  
風細くあつくくまのくさくや  
家のなつくくあつくとせぬ

孤屋 芭蕉 岱水 利牛 孤屋 芭蕉 岱水 利牛 孤屋 芭蕉 岱水 利牛 孤屋 芭蕉 岱水 利牛

絞汁やふ若よりよくたぐく  
 茶の里のまをほろくく賣出を  
 このまのまをほろくく賣出を  
 うれーし柳を今もさうさう  
 音の糸鳴さうさうさう  
 ふとん丸けくくわはあかひ居る  
 不届な溝と中のわらうさう  
 さつち坊さうさうあうさう  
 流るのひさうさうあうさう  
 是さうさうさうわはと君あう  
 志のまうさうさうあうさう  
 客を送るさうさうあうさう  
 今のまうさうさうあうさう  
 多貢まうさうさうあうさう  
 息災ふ祖又のまうさうあうさう  
 望忠まうさうさうあうさう  
 長月のまうさうさうあうさう  
 まうさうさうさうあうさう

芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛

これらるい宿の色うさうさう  
 山の根原のねうさうあうさう  
 よさうさうさうさうあうさう  
 飛の上うさうさうあうさう  
 花えふさうさうあうさう  
 余のくあうさうあうさう  
 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛  
 各九句

利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉 利牛

百韻

あり裸みさうさうあうさう  
 岸のいとさうさうあうさう  
 むあうさうあうさうあうさう  
 さ力あうさうあうさう  
 羊竹ふあうさうあうさう  
 るうあうさうあうさう  
 雪の月干あうさうあうさう  
 移もあうさうあうさう

利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛

炭俵

ぢがめよの中てよりおれりほあつ  
坊をすゝあれとやもり仁平に  
松坂や夫川へもゆるうらやう  
吹く時もつゝさ雪の夜  
十二三年の夜裏のむく  
卒堂を〜る者もとらんく  
日のあくる方であらむ竹のさ  
あまらぎさ〜のさ〜  
をに法のうらの泡とさわく  
天氣の相も三日月の思  
生なう〜さふおさ〜こは  
様の実落る尾根とさるし  
雪の裏のさり連と花らあり  
ほろくと二日笑のいほひお  
わろ〜あへの様よあらう  
わの種と揺〜さ〜  
野中の糸とさふつ〜を 深

孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡

渡く小西園武士の露のつ〜い  
尚きの人より今りり大早  
切焼の谷例〜極〜  
ら〜り納豆と作は〜度色  
瘡目とさき〜ら〜  
つ〜あひの名と〜  
と〜りの裏のさ〜  
これの月様よ負ある古根  
ま〜の長のあま〜  
ひ〜るとさ〜  
産〜と〜  
伐透を根と作のこれあひて  
赤いあまハあ〜  
濱と〜の男の為と〜  
師はは血危の紙のさ〜  
麻糎の細と羊〜買〜  
天の状とさ〜

孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡

度徳をうへふにりたるおの若  
 ちく起しして集る親 喜  
 城志さる新と瓦より指く  
 十日又雨のふりまひ〜まゝ  
 月着ふかきあけ城の路をり  
 弦お能海をきとる 楠  
 機娘能〜ひこも屋お能うり  
 小豆のちりの室静たうら  
 椽端う腫とる足と投おり  
 端の落うけを念入てえる  
 妻畑の勢地お後る傍尔杭  
 賣ふも志とるを親政の子  
 物毎も子持おぢれはた〜ふ  
 又此房の古若いの〜く  
 破王寺のう〜ふとれハニ言院  
 〜ハ〜ん〜く〜寂〜う〜り〜ま  
 為る者のらまのふ初と改知し  
 一つ〜ありふ能のまき 傷

孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡

沙〜お菰川ちきるおの月  
 ちあま〜よとる裏の縁あまい  
 ひとだておぢおぢとる勝の夢  
 入〜り〜して英然たう〜く  
 か〜さ〜ふ〜中〜の〜己〜の〜り〜と〜ま〜つ〜る〜  
 入来る人〜味啗豆を吐く  
 まらひいふ未帰給の秋田川  
 中茶分のえある宿のなつと  
 ほやく〜と〜と〜んと〜ほ〜と〜守〜を〜き〜れ  
 む茶入録ま〜る熱 けい  
 茶の内川越て居る標もら  
 尻標〜る〜る遠半す〜く  
 おら〜く〜る〜る〜く〜時のるゆき  
 入来つ〜く〜月の六 月  
 拭〜く〜お〜上の〜長〜は〜ら〜き  
 当をつ〜る 詞〜の〜う〜か〜い  
 大みのおぐ〜お畑の砂の〜く  
 何年善抱〜まぬ栲の木

野坡 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 利牛 野坡

安今ふ弓回心の何とと健  
丸九十日湿を己川らふ  
投あもむららまあふらうく  
足ちり一暮終よう信ふあ  
里離を順礼川のふららよて  
やうらうらゆめのと旅の積り  
勢ふのころ朝日志すの程を  
うん一果する八尋のころ  
町寧り仙甚依の口うら  
海法う淋く土ふふあ節  
夕月不醫老の名字とすそ  
白く戻る寝のやよと此  
定免と今年の風不熟屋う  
りもや作らゆめあぬおと  
暑病の解ふ土用とらうら  
貴月ふらてこゆるを坂  
城りせぬ船路屋のむの店を  
門建あると町のあ

野坡 利牛 孤屋 野坡 利牛 孤屋 野坡 孤屋 利牛 野坡 孤屋 野坡 孤屋 野坡 孤屋 野坡 孤屋 野坡 孤屋 野坡 孤屋

破岸色一重の苑の咲く  
三人なうらおも一ろき

野坡 枕筆

春之部發句

立春

春あふりつをや浮勢の初便  
赤き色やまのうらをうら  
みらうくのうら葉織ん葉の海を  
まや從入丹波の霞の岸を  
刀さそ供わつとく今秋の文  
いそくまを春のかさこま  
喰積やあまのふらふの梅相  
程いそく門迄坊まのふら役  
目下あま申の河や年の時宜  
初日我我差こまつまをえや  
長松う親の春てあま西堂

芭蕉 濁子 杉凡 击来 西秀 洒堂 樽水 沾圃 孤屋 利牛 野坡 露沾



うらなほ梅の枝よりの花もたまりり 曲翠  
梅うらなほの節よりの花もたまりり 支考

雲のうらなほ

伊勢

梅ちやあきのまの日の白み 土芳  
うらなほの湯後の花もたまりり 利牛  
赤いこの口とぬくり梅の花 游力  
みちのくうらなほの梅の花 野坡

あ梅の娘もあはるる花戸の 杉風

あ梅の娘もあはるる花戸の

とくもあはるる花戸の 其角  
七のや花いふく切刻し 野坡

うちわかれてあ梅の花もたまりり 仙杖

洛よりの文のま

梅月一足つもとくれの 去来  
大和や梅の花もたまりり 丈草  
あちや梅の花もたまりり 仙花

あちや梅の花もたまりり 仙花

洛川の念

あちや梅の花もたまりり 利牛

十六日とや梅月の古き賣 之道  
梅の葉もあはるる花もたまりり 野坡  
あこのあはるる花もたまりり 其角

鶯

うらなほのうらなほと息もたまりり 嵐雪  
あちや梅の花もたまりり 其角  
うらなほのうらなほと息もたまりり 桃隣

あちや梅の花もたまりり 野坡  
あちや梅の花もたまりり 利牛

柳

あちや梅の花もたまりり 湖春  
あちや梅の花もたまりり 素龍  
あちや梅の花もたまりり 野坡  
あちや梅の花もたまりり 一凡  
あちや梅の花もたまりり 利牛  
あちや梅の花もたまりり 芭蕉

椿

あちや梅の花もたまりり 孤屋

○炭俵

枝をく伐らぬを核の那 湖春  
 念わくをのつらむ核小 曲翠  
 派のうらみきく花核 嵐雪  
 ものゆも核を赤核の赤核 支考  
 ほき掃除して核をみる 野坡

花

うん程のふまのりゆ  
 へく幕抄はまきかのまあ  
 乃あうはまのあうふら  
 の核のまをたのみ

四のわきの核をぬる 芭蕉  
 むらりやゆて花のま 杉風  
 うらくとまのまのま 文章

何のの核の

花のふゆ

申もとまおまのまのり 素龍  
 花もや白きうらまのま 去来  
 鞠のの陽と丘核や核の花 孤屋

花をく伐らぬを核の那 荆口  
 念わくをのつらむ核小 斜嶺  
 派のうらみきく花核 北枝  
 ものゆも核を赤核の赤核 湖春  
 ほき掃除して核をみる 其角  
 花のふゆをたのみ 兎雪  
 うん程のふまのりゆ 智月  
 へく幕抄はまきかのまあ 之道  
 乃あうはまのあうふら 大  
 の核のまをたのみ 大  
 四のわきの核をぬる 芭蕉  
 むらりやゆて花のま 杉風  
 うらくとまのまのま 文章  
 何のの核の  
 花のふゆ  
 申もとまおまのまのり 素龍  
 花もや白きうらまのま 去来  
 鞠のの陽と丘核や核の花 孤屋

○炭俵

上巳  
 菅原と小川のわきま 沾徳  
 花のふゆをたのみ 桃隣

こつこつと秋の林はいつと秋の鐘 其角  
 鬼のふし腕と居るも 誰うぬ 美濃 如行  
 日半迄とてられてあやや樵の光 野坡  
 麻の種毎年 踏く樵の花 利牛  
 藪垣やまの鳥つくりのむ 孤屋  
 まつたの鳥つくりのむ 枯干か 芭蕉

淡路田又

淡つちふふ金つちふふ 少あゆみ 芭蕉  
 まるや 櫻の葉つちふふを 折る 芭蕉  
 雲のつちふふの葉や 二三半 子珊  
 伊もくくみ 龍門のつちふふ 伊賀 無雅  
 もののり 焚火の煙や 風の末 伊賀 猿雄  
 多相よふふふふふの葉の 籠か 仙華

旅行つちふふ

法衣坊の垣より 月ハ 葉の形 野坡

は集いふふ半をふふ 孤を 核を

何んかふふ川まで みるくく

そらふふふふふふふふふふ ひもぬ 野坡

梅さくらさくらさくらさくら 利牛

夏部之抜句

首夏

陰臭の裏は 月を 衣のく 嵐雪  
 衣のく 十日を やく 花のうり 野坡  
 佛とぬく 袂ぬく 袂ぬく 九節  
 背より やく 袂ぬく 袂ぬく 雪芝  
 花の味を 袂ぬく 袂ぬく 子珊  
 扇の 暖 扇白く 利牛

うの花

卯の花 やく 袂ぬく 芭蕉  
 うの花 の 袂ぬく 袂ぬく 去来

旅行つちふふ

卯のふふふふふふのふふふふ 許六  
 うの花 ふふふふふふふふ 支考

題つちふふ

棹のふふふふふふふふ 湖春

陸宗紙池より蓮あるふりぬ 素堂  
うらひまや竹の子露ふれと唱 芭蕉

郭公

やまをこい二階ふ藤よりほろき及 桃隣  
ほろきまら一二の燈のあけぬか 其角  
ゆげと月のおふもんほろきまを 嵐雪  
桃竹の空み陰よりほろきまをす 杉風  
あうられてあまもやまや郭公 芭蕉  
まをまやあまよりやまを 素龍  
あまもほろき風よりまふなる 利牛  
ふ規程のあまぬ核より 野坡

麥

柿寺よりま植い甲や旭より 美濃 荊口  
まの穂とまふまよりや花は山 十川  
まの穂の田植やまをまをまを 許六  
海の穂の川流まをまをまを 利牛  
刈りまの白の宿の門 利牛  
かれ一時

ま細やあめけりてむの甲 野坡  
みねよりこころと

浦風やしらるる 盛水  
端牛

み月多や傘ふけりて小人形 其角  
さくさくふれりてさくさく風の色 大坂 洒堂  
み月とさくさくさくさくあめめめ 桃隣  
文りやうくはくさくさくさく 嵐雪  
みとのやい首の首とさく甲をさく 仙花  
所々のさくさくさくさく 素龍

夏歌

あつねとさくさく町のあつねさく 卧高  
花はあつねさくさくさくさく 斜嶺  
二三毒籠さくさくさくさく 長崎 喜町  
いげ山の力あつねさくさくさく 猿 雄  
後河原や花梅とさくさくさく 芭蕉  
此白のさくさくさくさく

五月雨

○炭俵

此のれやとありくある丸木橋 素龍  
あまのまや川大和川 槐隣  
さくらふ山新とほるる子伝不 野坡  
あまのまやあのをちよわる 菫蔭<sup>マコハク</sup> 嵐蘭

この白い槐隣よりきてくぬ

六月の夜を龍と枕す力のく本 岱水

涼

川中の板あふよころふもくみか 芭蕉  
月影ふうくくあまやまのまや<sup>女</sup>の南  
涼しくよほふまこころる竹の枝<sup>長寄</sup> 介七  
り蛇とまいてくくあまのまや<sup>探</sup> 芝  
清風いそくれて涼しくみ佐の夢<sup>智</sup> 月  
ま〜〜ま〜とまれと桐の葉<sup>備前</sup> 兀峯  
涼しくあまのまやのまやのまや<sup>去</sup> 末  
より月の影ふてま〜むま〜<sup>野</sup> 坡  
影〜〜<sup>素</sup> 堂  
楊柳 定ぬれ札のあ〜〜<sup>杉</sup> 風

野中むくや砥波まじりて流るる 西秀  
世の中や年貞島のま〜の花 里東  
ふくあ〜〜〜〜〜〜〜〜 嵐雪  
水曾流るる

やまあ〜〜巴とあまの田植る花 許六  
ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 智月  
く〜山や人もま〜〜〜〜〜 北親  
晩のゆとらま〜〜〜〜〜 乙州  
あまのまやま〜〜〜〜〜 文艸  
ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 仙花  
一い〜〜〜〜〜〜〜〜〜 楚舟  
あ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 残香<sup>美濃</sup>  
秋の身ふわけるるあまのまや<sup>嵯峨</sup> 為有  
あまのまやあまのまや<sup>怒</sup> 風  
け〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜 祐甫  
一枚い〜〜〜〜〜〜〜〜〜 仙花  
牛のまやあまのまや<sup>嵐</sup> 雪  
ま〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

かゝる戒めあひしく送るしじふふふ  
あるまふそまことさうくあふき  
あふりなほくああかきうとあひて  
あふせられぬまはけとまひて

利牛

あふり人の別墅ふいさかきまきそふ  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

野坡

藤く部

秋のあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふり

各月

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

湖春  
去来  
荷兮  
祠堂  
里米

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

利牛  
其角

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

素龍

七夕

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

其角  
孤屋  
嵐雪

盃蘭盆

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

洒堂  
李由  
野坡

朝貞

閑閑

あふりあふりあふりあふりあふり  
あふりあふりあふりあふりあふり

芭蕉  
利合  
湖春

秋虫

幸よれハ夢ハくらくらきりくらくら 大津 智月  
 悔よハ人のこころやたのしく 文 州  
 晴御ふくして 暁 為有  
 くらくらや暑そ 追ゆる 後のと 孤屋

鹿

友席の啼とえらる小麋 車 来

人のめめふりく

麋のふむ泣や 双の躬 暁形 素 龍

旅りのとき

と江流やまういふらる 麋の亭 土 芳

草花

宮城野の萩や 友より 秋の花 桃 隣

花もくらくらくちうらや びら雀 野 童

片島の萩や 刈りて 篠の 暁 椋 雛

芦の穂や 秋に 揚る 友より 艾 草

ちうはははあて

芦のちよ暑くくくや 暑の 後 去 来

女中の草花

草花や 鼻のそとある 其 角

園菊

葉畑おくある 芳のくわり 杉 凡

紅葉をふふふ 桃 隣

秋植物

柿のちる 利 牛

萩葉や 友より 祐 甫

秋風や 花子の 敷の 木 白

眞ふ干して 友より 孤 屋

うらうらしの名と南変くしと

うれうれ世南くんとて

ゆらゆら未詳わつと天の

又ハツたうれとつと

とこのあるくこの

あつたうーこれ

ハ油うまうれけめ

天資、自然の理さうく恨む

炭俵

うれ、色、く、ら、り、も、な、る、は、な、さ、り、の、か、い、  
 且、竹、垣、の、と、一、の、う、い、あ、あ、る、よ、く、  
 の、は、合、あ、り、と、ま、ま、に、い、に、ま、り、さ、る、の、  
 に、ま、ま、と、ま、ま、の、つ、も、く、ふ、よ、う、も、ま、ま、  
 て、ま、ま、の、ま、ま、に、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 の、く、け、ま、ま、の、ま、ま、の、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、  
 ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

野坡

あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
 あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

嵐雪  
 丈草  
 酒堂  
 荷兮  
 利合  
 支考  
 地枝  
 依々  
 其角

冬之部 初冬

○炭俵



風や沖よりさしこむ山の上  
 其角  
 市井や木葉を吹きまわす  
 挑隣  
 ちかしの破り今朝もさう  
 芭蕉  
 梅の枝や露法師のまじり  
 支梁  
 梅の葉のきぬりまじり  
 斜嶺  
 刈り蕎麦の波の音あひま  
 桐實  
 風の音よりさすまる小舟  
 残香  
 柳の葉や梅のまじり  
 楚舟  
 風や 吟 志 梅の面  
 八桑  
 南の山小笠  
 亦松の根ふさぐり甘梅は  
 挑隣  
 第目よわおの種決のまじり  
 游力  
 時雨  
 芋谷の根さすり初時色  
 荊口  
 是より沖の風あひま  
 文章  
 芭蕉海とわつ青屋ふさぐり  
 斜嶺  
 わらぬ屋く今日も雨多よ  
 許六  
 宿海とわらぬ屋く

旅懐のころり

少根らんれとわりの印は  
 野坡  
 大根川とつとつと  
 芭蕉  
 勢動よ小坊さすり大根川  
 野坡  
 津巻とこれハあそび大根川  
 野坡  
 外送さすり骨の太大根  
 酒堂  
 らしととつとつとつとつと  
 野坡  
 人夢のおまことさすり  
 野坡  
 このはく先挨拶もさすり  
 木峰  
 蕎麦切よ吸物わらぬ屋  
 利牛  
 是もさすりさすりさすり  
 我眉  
 臭柳や庭くらくらとつとつと  
 里来  
 右の二白ハ川川のをく  
 野坡  
 比地あうりの状のそにまじり  
 野坡  
 みく今多よわらぬ  
 野坡  
 どのをよとつとつとつとつと

炭俵

初巻のふりかへるの鼻をしら  
とつちや他 藤の影をのきつて  
巻の目ふを懐くこと 駒 鶴  
まのりやうまうらうらうらうら

そのまの 鳴る寺やう

枝のまのを 藤をうら 夜の 鶯  
葉の 鶯や 作をく ころの 巻の 鶯  
初巻や 先を 巻く ころの 鶯  
巻巻の 枝町さうる 巻吹く  
海山の 巻を 巻く 巻吹く  
いの 井や 曲交ふ ころの 巻

歌 不知

かあしこの 箱ふおろむ 枝種か  
巻の 巻も 枝種 の うらむ 向の 端  
禪門の 羊豆袋 ぬらむ 十枚か  
お久焼の 巻物 ころれ 村うらむ  
白巻の ころを 巻く 巻吹く 著  
楷の 巻や あらむ ころの 又六尺

相黒亡人

利牛 買山 依々 猿 雖 支考 北枝 許六 湖夕 乙州 素龍 呂丸 芭蕉 許六 智月 之道 丈草

庚申や ころふ 巨龍の ころる 巻  
誰と 誰う 縁組 巻んて 里津 巻  
はく 巻巻 や 巻く 巻の 巻

そのまの

煤を ころい 巴く 扱つる 大工 巻  
煤 拵 障子 ころく ころい 代か  
雁つ ころや え 扱つる ころる 巻  
ふ 外の ころる ころる 所 巻  
巻を 巻 巻ふ 巻く ころる 巻

歳暮

このまの 又らうらうら 同く  
そのまの 巻ぬ 舞入 ころあり 巻の 巻  
あーま 巻せて 巻一 巻く ころの 巻  
巻く ころの けし ころる 巻の 巻  
巻の 巻い 巻く ころる 巻の 巻  
ころの 巻く ころふ ころる 巻の 巻

芭蕉よりの 又ふられの 巻

つらつら 巻く 巻く 其の ころる 巻

残香 其角 全 芭蕉 万乎 野坡 嵐雪 智月 杉風 李由 智月 孤屋 猿 野坡

○炭俵

爪をくちやさくや年をり

素龍

の年よまんとわくも状ひら

湖春

俳諧秋之部

秋の空尾と此松小雛れり

其角

おくれて一羽海こころる鳥

孤屋

新芳不日備格る貝吹く

全

舟のりらるる四非の門

角

裡よりよの光梅もあはれり

全

つらひらちいぬをこころまを

孤屋

下東い字後の葉をみせられて

全

坊々のそとる葉いとくき

其角

息吹りつと 霍乱の汗

其角

田の畔ふ早苗起く投くを

孤屋

道者のたきむ編草の糸

其角

り燈のりやうらむらむら

孤屋

形ふかのきくうくぬの月

其角

鈴繩より鐘のそとれいり

孤屋

唇のりらるる 茂なるあはれ

其角

ゆゑその梅津桂の花をそら

孤屋

むくりのふあり志のをせてを

其角

いとをねたをそと金のつうひを

全

まの端のあはれらるるき

孤屋

夏草のぐふされてすれり

其角

あまこととくも小雀りやう

孤屋

羊の豆蜜柑の核もあはれり

其角

すうときわらうら風をとま川

孤屋

君とのいこそは決すめあはれり

其角

釋と燈との元あつる花

孤屋

幸崎へ雀のこもる秋の雪

其角

おより冷れぬ月のそら

孤屋

残菊とて花もあはれり酒の所

其角

と墜れし小塔とゆく壁

孤屋

名ッ 小栗 蟻む元言よせてをあら

其角

炭俵

うらやましくはなちの船 孤屋

孤屋 悠々たる如きく遊べのちり

うらやましくはなちの船 孤屋

其角 孤屋

各十六句

天野氏 奥行

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

うらやましくはなちの船 孤屋

桃 隣

野 坡

利 牛

桃 隣

野 坡

利 牛

野 坡

利 牛

野 坡

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

かみかみらう 娘の仕合

利 牛

桃 隣

野 坡

利 牛

野 坡

利 牛

野 坡

利 牛

桃 隣

野 坡

利 牛

桃 隣

野 坡

利 牛

野 坡

○炭俵

京ハ忍別家より急入  
 焼おふ畑合とる蜀田  
 野を盗んて今日をわくる  
 野を盗んて今日をわくる  
 先仲まてハく四入舟  
 ゆてよう葉くくく花の陰  
 ちくも風のふくぬ去野

神皇月市日海川より野島

振賣の馬あまをこえいを條  
 降てハアまこ時ぬまる新  
 番匠の根の少年と川より  
 戸をけあう月をさるうぬ  
 好おの隙と徳さぬ秋の風  
 割木の安き園林家  
 網の老道つとふふあうけく  
 早くくくく二十八日  
 らくくくハ城く軍のたるく

芭蕉

野坡 孤屋 利牛 芭蕉 野坡 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉

淡氣の雪より難状とせぬ  
 明くち松燈を吹くして  
 肩癖ふたる湯盆の膏葉  
 と金の干糸刻むとくらのそ  
 馬くあぬ日ハゆて急をる  
 狗買の七らくくと考つれ  
 崎く門ある五十五石  
 は湯の隙鬼ゆとつげん  
 砂くぬくくくくく草  
 新島の糞もおうくをのよ  
 鳴くられくくくくく  
 川越の常一のよとあふれく  
 平地の寺のくまき藪垣  
 干ぬと日向の方ハわくらせく  
 陰むら鴨の芭蕉くくく  
 葉用不浮世とくくくく  
 又ゆ込あうくくくく  
 くくくくく大晦日も四の後

○炭俵

野坡 孤屋 利牛 芭蕉 野坡 利牛 芭蕉 孤屋 芭蕉

女家のこのむ秋の條先  
 中へて傍軍合の借のうひ  
 登とくきくきくきくきく  
 風やきて秋の路の尻さうり  
 鯉の鳴子の涙とらつら  
 ちんちんちんちんちんちん  
 目見まわりのつれのねちんちん  
 こころも花の三月中時分  
 悔炭のちんちんとらん春風

芭蕉 野坡 孤屋 利牛

雪のねとれ口とれハ菊を  
 日のおるまくの赤さあを  
 下着と一舟候りおひく  
 あいこころきくきくきく  
 身少あこころ風しんちん  
 雲とくきくきくきくきく  
 寒苔の泥されくきく秋のあ

各九句

杉 風  
 孤 屋  
 芭 蕉  
 子 珊  
 桃 隣  
 利 牛  
 岱 水

新こころくきくきく節うる  
 二三亭床ふわり門の裡  
 るの為ぬめさるる干巾の  
 巾のぼろぼろくきくきく  
 猪ふ子のさそるぬのちんちん  
 もお者のひんちんちんちん  
 めとく風めをやるまきこ  
 宵この月をきくきくきく  
 脊甲へのちんちん思とうあいう  
 茶むくころのきんちんちん  
 川くくくくくくくくくく  
 おりきまてて意味よき子のおう  
 脊戸へとまを山へりちんちん  
 わのちんちんちんちんちん  
 花集めてはおおなき精選日  
 咲床と揺くきくきくきく  
 ちんちんちんちんちんちん  
 ちんちんちんちんちんちん

野 坡  
 子 珊  
 水 圃  
 石 菊  
 杉 風  
 石 菊  
 子 珊  
 桃 隣  
 依 々  
 利 合  
 野 坡  
 杉 風  
 石 菊  
 杉 風  
 岱 水  
 孤 屋  
 曾 良  
 桃 隣  
 依 々  
 沾 圃

○炭俵

隣へひく火とさうく来る 子珊  
 又々おも 佛の舎て地を唯 利牛  
 括をさうして 賢さういふし 杉凡  
 大坂の人よまれくるをのみ 利合  
 酒とよま航く 担母のきふ入 野坡  
 さうけぬる 水糸の二滴のまけり 子珊  
 次の小舟をてつふむせるを 利牛  
 泊あふかして居れは 杉風  
 七つのうらふを 曹良  
 花のるらくさふゆふ 桃隣  
 男まゝいそふ 依々二 依々二  
 依々二

杉風五 孤屋二 芭蕉一  
 子珊五 桃隣四 利牛三  
 盛水三 野坡三 沾圃二  
 石菊二 依々二  
 曹良二

龜田甚三郎校正

芭蕉句集

俳諧玉葉集

俳諧礎

俳類題玉詠集

闇雲愚抄

一茶句集

百人集

大和詞

嘉永四<sup>辛</sup> 庚年六月

日本橋通四丁目十番地

白樂圃 枕屋 江嶋 伊兵衛

303

